

『ジーニアス和英辞典』 これまでとこれから 小西友七



このたび『ジーニアス和英辞典』(以下『G和英』)が初版刊行から6年を経て改訂される運びとなりました。『G和英』初版は、英和・和英の単なる合体というだけでなく、コンピュータ技術による「融合」という和英辞典としては歴史的な milestone として、意義のあるものだと思っております。が、アイディア先行ということもあって粗削りな部分もあり、いま一步洗練されたものにする必要を感じておりました。それだけに、生みの親のひとりとして、南出康世君を中心に進められてきた今回の改訂は心から嬉しく、期待に胸をふくらませています。

■ハイブリッド方式和英の誕生

『G和英』の初版第1刷が世に出たのは1997年12月です。『G英和』初版を1987年11月に出したあと和英辞典についても検討してきましたが、『G和英』の構想が生まれたのは94年ごろで、その後少しずつ形あるものに育ってきたようです。

私はかつて、従来の単なる「例文羅列型」——それも英文が先にあったと思われる用例——の和英辞典に対し、一石を投じるために、日本語から出発して、用法の差異や語法の説明、こうは言わないという非文まで添えた「用法指示型」の和英を出したことがあります。それが版を重ね、和英は売れないという神話を打ち破るのに一役買ったようです。その過程で、ふと頭に浮んだのが、『G英和』の利用です。この辞典は英和辞典の本来である受信型の基本路線は守りながらも、用法指示や語法も詳しく入れており、いわゆる発信面

も十分に配慮されている、これをなんとか裏返し(?)にして、日本語からの検索ができないか、それに本来の和英的なものをうまく融合すれば、その効果は倍増すると、当時では、まるで夢のような考えを抱くようになりました。

小宅でよく行われた編集会議の雑談の折にこんな話をした気もします。あるいはコンピュータに精しい編集部のIさんが案出されたのかもしれませんが。当時の日記のあちこちを眺めると、「96年6月2日、夕方7時Iさん来訪、用件の済んだ後に『検索辞典の件はトライアルを近々送る』と言って9時過ぎ帰る」とあり、その後、「これについて何回も交信があり、詰めを急ぐ」、「11月17日に校正刷が出てきたと速達あり、問題点や対応策についてFAXのやり取りが続く」、「暮れの12月8日に、とりあえず十数語を見たいとFAXを送り、12日夕あ行のゲラ届く」などあります。そして正月返上で目を通し、97年1月30日大修館のU氏・I氏が来訪、2時から7時ごろまで、これまで出た問題点を洗い出し、いよいよ本格的に始動することになりました。

まず、編集協力者の小西波津子さんに、大きくふくれ上がった資料の削除を中心に作業を依頼し、そして私がそれをカバーして「か」まで進んだが、これではとても間に合わないと考え、池田久美子さんに援助を求めることになりました。「削る」という作業は身を削るようで、「加える」ことより難しいです、とお二人は洩らしていましたが、私も立ったり座ったりで、最後は「えい!」とばかりにカットすることの連続でした。(これ

に、途中からは、編集部主導の本来の和英チームのゲラもどんどん回ってきました。)このようなことが文字通り、月月火水木金金の200日余り続き、家庭の主婦でもあったお二人には、私の苛酷な注文によく堪えてくれたと感謝しております。

また、Brezakさんと共同で英文チェックを進めていた三島隆二君からは、「…ネイティブチェックがあと少し残っていますが、頑張ります」(10/17)と、期限が越えて切羽詰った状況、それを受けての私も、最後の最後まではらはら、そしててくてこ舞いの毎日でした。

辞書の題名については、『G和英検索辞典』、『G和・英和辞典』などの案も出ましたが、結局『G英和』に対してすっきりと『G和英』となりました。一方で私は、この間に書き始めた「まえがき」で、我々の新しい方式を何と呼ぶかに頭を悩ませていました。ある日、そのころ『朝日新聞』に連載されていた堺屋太一の『平成三十年』という未来小説をたまたま読んでいたら、登場人物が「ハイブリッド車」を走らせています。これだ!と、はっと頭にひらめきました。我々の辞典は、和英に英和の機能を組み入れたので、正にこれがぴったりだ、と。この名称は広告用パンフレットにも大きく取り上げられ、副題としても成功したようです。

かくして、世界初の「ハイブリッド方式」和英辞典が誕生し、大修館の創業80周年記念を飾ることになったわけです。

■さらなる発展を求めて

幸いこの辞典は予想以上に温かく迎えられました。日本版 *Activator* と評された方もおられました。小沼利英氏の辛口の書評(『ぶっくれっと』No.132-3)も私にはありがたかったです。ある機会にこのことをUさんに話したところ、気にされてか、その後たびたび店頭販売リストを送ってくださり、よく出ていますよ、と慰め励ましていただきました。出版後3年目の春の英語辞典100冊

について、大阪屋「POS 導入店ジャンル別売上リスト」(2000.2-3月期)がたまたま手元にありましたので、辞典名だけ、それも簡略化してあげておきます(スペースのため上位の一部しかお示しできないのが残念です。)

G英和²、G和英、デイリーコンサイス英和・和英、インフォワード英和・和英、エクシード英和・和英、ライトハウス英和³、ポケットプログレッシブ英和・和英、新英和中、旺文社新英和中、デイリーコンサイス英和、リーダーズ英和²、デイリーコンサイス和英、グランドセンチュリー和英、プログレッシブ英和³、グランドセンチュリー英和、カレッジライトハウス英和、*Oxford Wordpower*、ロングマン現代英英³、スーパーアンカー英和、ライトハウス和英³、エクシード和英、初級クラウン英和、新和英中、など…

これだけ見ても、和英辞典が英和に伍して近年いかに躍進してきたかがよく分ります。一昔前までは考えられなかったことで、これによって我が国の英語教育界が志向してきた、「使える英語」「コミュニケーションの英語」がようやく実を結びつつある兆し的一端がうかがわれるようです。

また、英々辞典もこのリストには載っていません。私の若い頃には *POD*、*COD* が主でしたが、今は学習辞典が主流となり、*OALD* などの *Oxford* 系に、*Longman* 系、*COBUILD* 系などが加わりました。これは、外国の学習者を意識して、受信一辺倒から発信型への重心移動と受け取られます。最新のものには、**Don't say take a meal. Say have a meal.** — *LDCE*⁴ (2003) / **Note that you do not use 'What age are you?'** — *MED* (2002) といった注意書きも珍しくなくなってきました。

今後『G英和』のほうで、こうした世界の動きを反映させる一方、これを組みこんだ形をとる『G和英』のハイブリッド方式もますます洗練の度を加えて、理想の和英辞典に近づいていくことを祈念しつつ筆を置きます。

(こにし ともしち・神戸市外国語大学名誉教授)